

saveMLAK ニュースレター

第 40 号

桃山学院大学の司書課程で saveMLAK の紹介

私は 2009 年度から、桃山学院大学の藤間真先生ご担当の司書課程で、ゲスト講義を受け持たせていただいています。年間 2 コマないし 3 コマの講義を担当し、2012 年度からは saveMLAK のことも学生たちに話しています。

年度によって少しずつ話す内容は変わってきていますが、当初は①「震災復興支援活動を支える IT ～ saveMLAK などの活動～」、②「専門職のネットワーク ～ saveMLAK を例に～」といったタイトルで、2 コマを講義していました。今年度(2015年)は①がなくなり、saveMLAK について講義するのは②だけです。

内容をかいつまむと、以下の通りです。

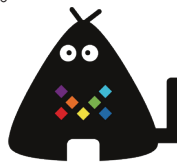
1. なぜ文化施設の復興が必要なのか
→MLA は「地域の記憶の場」である
2. 文化施設の被害状況を写真で紹介
3. プロボノの意義、情報専門職の役割
4. saveMLAK の立ち上げから現在までの経過
5. どんな人が参画しているのか
6. saveMLAK は何ができて何ができない
／できていないのか
7. ボランティア活動の難しさ。大勢の人間のネットワークが生む齟齬
8. 「だれどこ回答団」で作成した原発関連資料の事例
9. 「次の災害に備える」=saveMLAK メソッド
10. ネットワークの力を活用することの大切さ
11. ネットワークとは、「人と人のつながり」

saveMLAK は MLA 連携の成功事例の一つである、として紹介しています。さまざまな困難もありながら活動を継続していることを強調しています。

この講義を受けた学生たちがコメントシートに感想を書いてくれているので、一部を紹介しましょう。

「saveMLAK というものをはじめて聞いたけれども、有志でボランティアで協力合って WIKI を書いていたり活動がすごいと思いました」

「文化資料はただ生きるためだけならば必要ないが、少しでも知的な生活をしようと思えばそれらは必須のもの。震災でそれらの財産を失ってしまうと取り返しがつかない」



学生たちは一様に、図書館などの被害について心を痛め、文化施設も被害に遭ったという当たり前のことを知らなかった、ということに気づいて驚いています。saveMLAK のことはもちろん誰も知りません。プロの情報専門家がネットワークの力を駆使して、ボランティアで WIKI の何万ページものサイトを構築していることに感動してくれます。なかなか素直でよい子たちです。

災害はこれからも必ずやってくる、そのための備えが大事だということ、震災を忘れないことも復興支援なのだ、と講義で話すと、うなずきながら聞いてくれます。若い世代がわたしたちの活動に興味を持って志を繋いでくれることを私はひそかに期待しています。

【谷合佳代子】

(エル・ライブラリー (大阪産業労働資料館) 館長)

saveMLAK のファンド係担当

saveMLAK 活動紹介

個人的に参加したイベントで、saveMLAK の紹介をしたので報告します。

①MALUI Talk in Kyoto & 近畿地区 MALUI 名刺交換会

2015 年 6 月 7 日、MALUI Talk in Kyoto & 近畿地区 MALUI 名刺交換会が開催されました。名刺交換会のみ参加したのですが、オープンマイクの時間があつたため、saveMLAK の活動紹介をしてきました。活動歴の他、saveMLAK メソッドに重点をおいて紹介すると、博物館の関係者が「詳しく聞きたい」と興味を示してくれました。阪神大震災や東日本大震災の後、防災対策の必要性は感じているがなかなか実践できていない、開催館に合わせたシナリオで訓練できる saveMLAK メソッドは魅力的に感じる、とのことでした。

チラシを持っていくのを忘れてしまったのが反省点ですが、saveMLAK のことはあまり知らない MALUI 関係者の前で、活動を紹介できたことは良かったと思います。

②平成 OSAKA 天の川伝説を眺めながら交流する会

2015 年 7 月 7 日、大阪・北浜のイベントスペースで開かれた七夕イベントに参加しました。「平成 OSAKA 天の川伝説」とは川に星に見立てた青色ダイオードを放流し、天の川を再現するというイベントです。このイベントを眺めながら市民同士交流する、というのが標記の会の趣旨でした。参加者の活動 PR が推奨されていたので、saveMLAK のチラシを配布しました。15 名ほどの小規模な会で saveMLAK のことも知らない参加者ばかりでしたが、本好きな人も多く、活動紹介の反応は良かったです。みんなの経済新聞ネットワーク「船場経済新聞」の記者も来ていて、面識を得られたことも収穫でした。

【小村 愛美】

次ページへ
つづくよ